

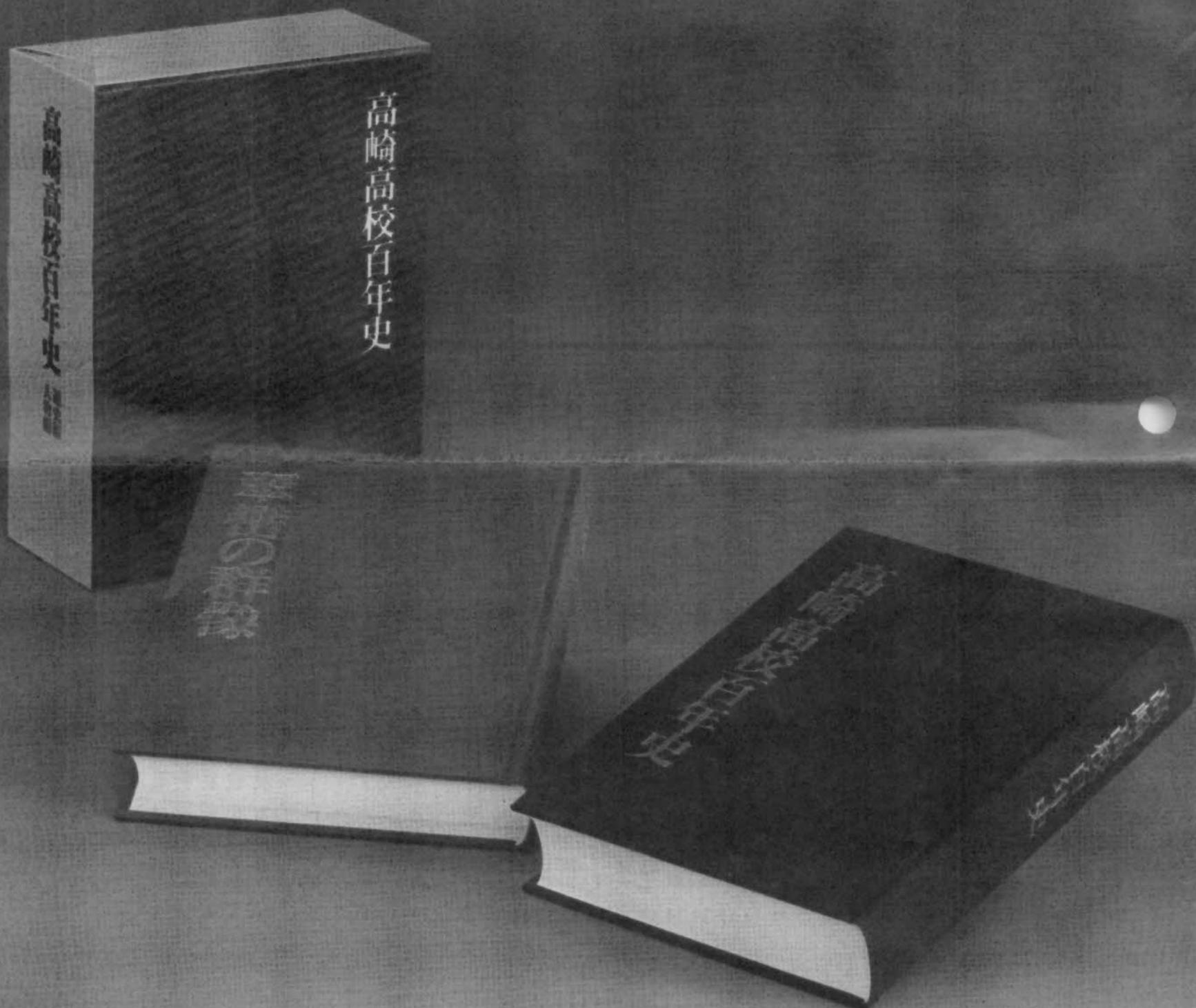
高崎高校同窓会報

1998

第32号

平成10年11月30日

特集／「高崎高校百年史」の完成





「インターハイ予選」で優勝したバレー部。6/19の「日刊スポーツ」より。

GRAPH FILE

高高同窓会報 No.32 目次

あいさつ	同窓会長 横田 英一	3
ご挨拶	同窓会長 横田 英一	3
ごあいさつ	同窓会長 横田 英一	3
ごあいさつ	同窓会長 横田 英一	3
類あつく、理想追はなん”を讀んで・同窓会副会長 佐藤 和徳	5	5
同窓会副会長に就任して.....同窓会副会長 有田 喜一	5	5
特別寄稿		
同窓会賛助人の由来等について.....戸塚 興嗣	6	6
激動期を過した49期.....矢島浩二郎	7	7
山荘記.....中林 勝利	8	8
論壇		
「人との出会い」.....井上 忠男	9	9
特集●百周年記念事業		
「高崎高校百年史」完成.....	10	10
「刊行案内」高崎高校百年史.....	10	10
上毛出版文化賞 特別賞受賞		
地域・職域の同窓会報告		
高崎市役所同窓会について.....青木 健二	12	12
榎名聖徳会より.....土岐 正	12	12
県庁「高朋会」について.....金井 達夫	13	13
「近況報告」京浜高崎高校同窓会.....大木 紀元	13	13
財団法人聖徳育英会の現況.....田中 順	14	14
創立百周年記念事業会計決算報告.....	14	14
●表彰・叙勲者紹介.....	15	15
●卒業生の作品展紹介.....	15	15
第8回聖徳体育会ゴルフ大会.....	15	15
●聖徳文庫.....	15	15
会員名簿について.....	15	15
母校だより		
各部の活躍.....	16	16
各部の活動.....	17	17
高前定期戦.....	19	19
古川先生逝去.....	19	19
最近の進学状況.....	19	19
人事移動.....	19	19
同窓会会計報告.....	20	20
新年総会のご案内.....	20	20
維持会費の納入について.....	20	20
編集後記.....	20	20
本部幹事会		



ご挨拶

同窓会長 横田 英一

この同窓会報が、同窓の諸兄のお手元に届く頃は、異常気象に悩まされた平成十年も終わりがけておりますが、会員の皆様におかれましては、ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。

私は、平成十年一月二十四日の同窓会新年総会において、小山禧一前同窓会長の後を受けて伝統ある高崎高校同窓会の会長を仰せつかりました横田英一でございます。立派な歴代の会長のように仕事ができるかどうか内心忸怩たるものがございますが、幸い素晴らしい方々に役員としてご就任いただき、私も精一杯勤めさせていただく所存でありますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ところで、今年も各界、各方面において同窓の諸先輩の目覚ましい活躍を見聞いたしますが、まことに御同慶の至りであります。同窓諸兄におかれましては、どうかご健康にご留意され、ますます立派なお仕事をなされますようご祈念申し上げます。

また、この会報の母校近況報告にもございますように、高崎高校の学業・運動等の分野における活躍には、いつもながら目を見張られます。我々卒業生にとつて母校の後輩諸君が力一杯活躍してくれることほど嬉しいことはありません。その意味でも現役合格率八十%、群馬県高校総体総合第三位（五年連続）という実績は素晴らしいの一言につきまします。これはもちろん後輩生徒諸君の頑張りの賜物であります。その高校生を教え、励ましてくださる諸先生方の並々ならぬご努力がありますことを忘れてはならないと思います。

この紙面をお借りいたしました母校の教壇に立たれる諸先生方に感謝と敬意を表したいと存じます。

さて、ご案内のように平成十年四月末日に「高崎高校百年史」が発刊され、おかげさまで持ちまして高崎高校創立百周年記念事業は計画どおりすべて完成いたしました。そして平成十年六月二十九日、高崎市内のホテルで開かれた同窓会理事会の後、創立百周年記念事業実行委員会の解散会が催されました。その会において創立百周年記念事業に関わる議事・報告等が満場一致で可決・承認され、和気霽々たる雰囲気の中、小山禧一記念事業実行委員会会長より解散宣言がなされました。こうして足掛け八年間にわたった百周年記念事業実行委員会の活動が、円満にすべて終了いたしましたことを、あらためて同窓会員の皆様にご報告申し上げます。これもひとえに会員の皆様のご支援のたまものであります。

私も募金委員長として微力ながらお手伝いをさせていただきましたが、その活動の中で、同窓諸兄の母校にお寄せいただく熱い声援には何度も頭が下がる思いでした。百周年のような大事業は、一部の同窓生の力ではとてもなし得ないことだと覚悟しておりましたが、いざ終わってみれば七千名を超える皆様から力強く暖かいご支援を頂戴することができました。これは皆今までの同窓会活動が広く同窓諸先輩の中に浸透し、理解と支持を得られていた証左であります。このような立派な同窓会を築いてこられた先輩役員の皆様改めて感謝と敬意を深く深く表さなければならぬと存

じます。

私事で恐縮ですが、私が高崎中学校に入学いたしましたのは昭和二十年四月であります。その年の八月十五日に終戦を迎えましたが、戦後の学制改革のおかげで、私も五十期生は高崎中学校三年間、高崎高校三年間と、合計六年間をこの乗附の学舎で過ごし、昭和二十六年三月に卒業させていただきました。戦前の皇国日本から戦後の民主国日本への変貌にございますように、この高崎・高崎での六年間は本当に筆舌に尽くしたい経験の連続でした。近年ではおそらく最も貧しい少年時代を生きてきた私たちは、その後日本の歴史上、最も豊かな社会に暮らしております。そのありがたさを思うにつけて、少年時代のこの異常な経験は私たちの世代だけで終わりにしたい、と強く思われます。

百一年目に入った母校高崎高校の歴史が、現代のよいうな、平和で文化的な香り高い記録をいつまでも刻んで行く事を期待しております。そしてこの同窓会活動が、ただ同窓諸先輩の思い出を彩るためだけでなく、現役高校生と共に、平和で文化的な香り高い母校の歴史を育む一助となることを願って止みません。

まことに言葉整いませんが、同窓諸兄のますますのご発展とご健康を祈念申し上げますと共に、今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。新任のご挨拶にかえさせていただきます。

（群馬トヨタ自動車㈱代表取締役社長 50期）



いあいさつ

学校長 桜井 直紀

同窓会報第三十二号の発刊を心からお慶び申し上げます。また、会員の皆様方には平素から母校の教育の充実・発展に多大のご支援・ご協力をいただいておりますことに深く感謝申し上げます。おかげさまで持ちまして、生徒たちは勉強に部活動に熱心に取り組む、いづれの面でも立派な成果を上げており、本校の大きな誇りとするところです。(詳細は本会報に別途掲載されておりますので、省略します。)

さて、高校生も含め現在の青少年には、センスの良さやスマートさ、異文化の受け入れへの柔軟さ、メカに対する強さなどを持っており、これらの良さを更にのばすことが重要です。一方では、社会性や倫理観の欠如、自立の遅れなどが言われており、社会問題になっていきます。学校においては生徒の良さと長所を伸ばしつつ、不足部分を補うことが大切であり、これからの社会を背負う若者として、柔軟な思考力や創造力、強靱な体力や精神力等を身に付けさせることが求められています。本校においては、これらに向けて、めぐまれた人的・物的条件を十分に生かして教育を進めることとしていますが、今後は次の考えも大切と考えます。

その一つは地域社会に貢献できる力を付けることです。卒業生たちは経済・文化などを始めとする幅広い分野で活躍していますし、地域でも中心となって活躍しています。生徒たちも諸先輩と同様に幅広い分野で活躍して欲しいと思います。特に卒業生は青少年の健全な育成を図るために、青少年団体の指導者・育成者として活躍していただきますので、この面の力を養うことも大切です。そのためにも、高校生が大人と子どもの中間に位置する若きリーダーとして、また、補助者として子どもの活動に参加するよう、学校としての働きかけや情報の提供に力を入れますので、地域においても高校生が活躍できる場を用意して欲しいと思います。

二つ目は心のふるさとを持たせることです。生まれ育ったふるさとを大切にしたり、高高を誇りとして同窓の集まりに参加したりは当然であります。大切なことは、行動や生活の面において日本人としての考えを持ち、実践することであり、永い年月にわたって形成されてきた倫理や道徳を大切にできる人間になって欲しいことです。今、日本人が日本人としての生き方を忘れ、また見失っていることこそが大きな問題であり、言うなれば根の無い状況にあることです。高高の新たなスタートの中で、しっかりと根を持つ人間の育成に力を入れることと考えます。



いあいさつ

同窓会副会長 原 浩一郎

行く川の流れば絶えずして、しかも元の水にあらず。淀に浮かぶ泡はかつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし。高時代は昔習った鴨長明の方丈記の一節です。諸先輩のご努力により百周年という大きな節目は過ぎましたが、正に時の流れは絶える事なく続いています。横田会長のもとに次の二百周年に向かって新しいスタートが切られました。留まる事のない流れの中に更なる伝統を重ねて行く一翼を担うことに強い責任を感じています。考えてみますとこの世の中には様々な人との出会いがあり、その集合体としての様々な会が有ります。仕事上の会、趣味の会、など挙げれば枚挙にいとまがありませんが同じ学舎で学んだ者達の同窓会という集まりの楽しさ、更に言えば同窓会の中に存在する同期会の楽しさはこの世に有るあらゆる会の上るか上を行くものと、最も大切にしていきたいと感じています。自負する訳ではありませんが、吾々五十六期会が生方代表幹事の基に他の同期会に勝るとも劣らない

活躍を同窓会の中で果して来た事は誇りを持って披露できるのです。これは同期生全員が何にも増してこの会を大切にしてください、上下の関係の何もないこの会を全員で盛り立てて行こうという気持ちの現れであります。各期の活躍の集合体としての同窓会が更なる各期の親睦の上に発展していく事を切望すること大なるものがあります。日本は今未曾有の変革期に直面していると思います。今迄積み重ねて来た経験、考え方を一度全て捨てざる事から出発しなければならぬかも知れません。多くの人材を輩出して来た我が母校が、次の新しい日本を作り上げて行く人材を雲霞の如く引続き輩出していく事を同窓生全員で祈りたいと思います。

(全米商連副理事長

株ぐんべい取締役社長 56期)



”頬あつく、理想追はなん”を讀んで

同窓会副会長 佐藤 和徳

前高崎高校長の故古川功先生が、「校長の詞心より」と副題をつけて文字通り遺稿となった「頬あつく、理想追はなん」を一服の清涼感をもって、読みました。

小生高高在学中に六十周年記念行事を迎え、草野心平氏の講演会で「翠巒」にかわる新校歌、通称セルリアンブルーを紹介されました。その校歌を何気なく唱い過していた訳ですが、その校歌の一節が古川イズムを凝縮した言葉であるとは……、在りし日の先生のお姿と重ねあわせて感無量です。

先生は高崎高校定時制夜間部を卒業後に、東北大に進まれて、他学部で学生と共同生活を余儀なくされる寮生活と家庭から一切送金なしのアルバイト生活を続け、時代の中で苦学を強いられました。大学卒業後は伊香保中学を皮切りに、県内主要高校で国語教師として教鞭をとられ、平成四年に前橋第二高校（現清陵高校……古川先生の命名）の校長に就任されました。

前橋第二高校は定時制・通信制併修の高校で私共の病院の数人の看護婦も就学した学校です。余談ながら全国定時制高校の排球大会に於いて唯一つの通信制のチームとして、その看護婦の卵達が、代々木国立体育館で勝ち進む快挙をとげ、元全日本監督松平大会会長に激賞され、その感激を私に語ってくれた日もありました。その前橋二校を画期的なコンピュータ管理の単位制高校に、古川先生の実力で変貌させたこととす。

平成七年、高崎高校に校長として赴任後も独特なアイデアと決断力で「社会人としていかに生きるか」を視野に入れた六十五分、五時限授業をとりいれ、大きな成果をあげたこととす。

先生のしなやかな感性と幅広い御人格はその御経歴もさることながら、受験結果のみに捉われないことなくクラブ活動の奨励などにも現われます。「文武両道は初めに行動ありき」としています。

日本の母親像……母として、妻としての仕事のほかに、お年寄りの世話をしたり、町内の役を引き受けたり、PTAの場で活躍したりと、一人で五役も六役も務めている事を例示して、「部活」を行って大学受験を志望する「両道者」が、「二兎を追う者一兎も得ず」として受験勉強にのみ精進する「単道者」を進路志望達成状況の中で凌駕している事を強調されています。

携帯電話でさえ余力のあるうちに充電を重ねると、遂には容量の低下を招くことを例にとり、力の出し惜しみをさげ、十の力を尽くした者は、初め予測もなかった全く新しい十の力が湧き出てくること、それが社会を生き抜くコツであることを教示してくれています。

今、古川先生が私の診察室を訪れ、諸検査の後に、「樂觀を許さない疾病」であること、国立ガンセンター頭頸部外科への紹介を伝えた時に、古武士の如く端然と聞かれたお姿、ガンセンター海老原院長から耳下腺痛の手術と病理、その進展度から重粒子線照射の必要性を、それに苦しい治療を従容として受けておられる事を電話で伺った日のことを憶い出しております。

私共の在学中にも、3F精神を説いた故田中悦平校長があり、そのイメージとダブらせながら、相談相手の居ない孤独な管理職……高校校長に非常にも恵まれた母校の幸せを思うのであります。

（第一病院長 高崎市医師会副会長 57期）



同窓会副会長に就任して

同窓会副会長 有田 喜一

この度は伝統ある高崎高校同窓会副会長に就任し、横田会長の補佐の一員としてお役に立てれば幸いと存じます。

高崎高校同窓会はその結束の強さが有名ですが、それは同窓会総会に出席されている方々一様に感じていることと思えます。

しかしながら参加している人数あるいは会費を納入している人数から見ると、その数は非常に少なくこの現実をどう改善するかが今後の課題ではないでしょうか。もつと気軽に同窓会を考える必要があるのかも知れませんが、あるいは色々な形で同窓会プログラムを開発し、参加する人達を増やすことを考えるのも良いかも知れません。

又、この時代は大きく変化して居り、高高三年間の活動をいつまでも引きすることも困難で同期の活動あるいはクラブの活動が中心となるのかも知れません。

古きを敬ぶ事は必要ですが、それも時代の流れに逆らう形では困難であり、逆に若い人達が参加できる何かを取り入れる努力が必要なのではないでしょうか。そんな事を初心に返って討論することが今求められているような気がいたします。

社会全体が大きく変化していく今こそ、同窓会においても変化を求めて行く必要があるような気がしています。

（群栄化学工業㈱代表取締役社長 60期）



戸塚 興嗣

同窓会費納入の由来等について

創立七十周年が過ぎて、今度の創立八十周年の寄付金を募集するときの校内幹事の最年長者は、どうやら私になるらしい。今までの募金のうち、一般会員の募金は校内幹事が手分けしてお願ひにあがっていた。私も何回かお願ひに廻ったが、会員の皆さんから「学校は、普段は何の音沙汰もないのに寄付のお願ひのときだけ来る。」との不満を多数の方々から聞きました。当時毎年簡単な会報を発行していたが、これを一般会員に届ける方法がない。なんとかしなければならぬ。

その当時、会費が不足したので、小山長四郎会長に報告しました。今までは会費の収入はすべて入会金に依存していました。が、会長から「入会金だけに頼るのはよろしくない。役員が出しましょう。」と有り難いお言葉をいただいた。校内幹事会にはかると、志村甲子郎先生が、「会費を集めるという名目にはどうか。」との意見を出してくれた。そこで「一口千円で会費を徴収する。」という案を会長に持ってゆくと、「会費と言ってもどこまでも寄付であり、納めなくとも翌年は催促しない。」という条件付きで許可があり、同窓会総会に計って可決されました。

会長のいう役員とは本部役員のことであると思われたが、少し欲を出して、期別幹

事・地区別幹事まで郵送でお願ひした。会長は当時の金で三万円だしてくれました。常任幹事一万円・幹事五千円の内規も決まりました。期別幹事・地区別幹事も多数納入してくれました。お陰さまでその年の経常費は、三十数万円の黒字となりました。

今だ。会員数は約一万人、郵送費は当時封書が三十円なので約三百万円、封筒づめ等は校内幹事の労力奉仕でやれば「全員通知」が可能になる。もし三百人以上の納入者があれば継続も可能となる。会長にこのことを申し上げて許可を得た。早速実行にうつる。なにしろ一万通である。宛名書きだけでも大変だ。これは校内幹事が手分けしてやってくれた。次は封筒づめ等、自習時間の生徒を校内幹事が監督して行い、何時間もかかった。

結果が出た。送った会報はわずかに一枚の粗末な物であったが、応募者数約千人百万円を超える会費収入があった。早速会長に報告した。会長は「会員の皆さんは、同窓会に大いに関心があるんですね。有り難いことです。」としみじみ言われた。会長は毎年のように、「総会の出席者が、京浜同窓会の出席者より少ない。もっと出席者を多くできないものか。」と言って居られたが、その後言われなくなった。余剰金が沢山出たので、常任理事会の許可を得て、

高崎信用金庫に定期預金した。

年会費の予算総額が百万円を超えたので、会長に「この際、会計監査を置いては如何でしょうか。」と申し上げると、非常に喜んで、「是非そうしなさい。監査は若い人がいいですね。」と言われた。翌年の総会で四十七期の須水孝氏・五十期の石井敬之助氏が選出された。

その後、収入が増えたので、会長の意図で、学校図書館の援助・翠蘭会館(合宿所)の修理をした。またアルバイトを雇い、校内幹事の雑務を減らした。原一雄会長になって、会費を二千円に上げた。そのため、同窓会誌は、会員の方々のお力で立派な冊子にすることができ、同窓会総会は、設営の当番を期別の順送りに行うことにより、参加者が非常に増えて、盛大に行われるようになった。小山会長の企願が今になって叶ったわけである。翠蘭体育会への補助も行ない、また、創立百周年記念事業の準備金等に充分なる支出ができたとのこと、同窓会の益々の発展を期待します。

最後に、創立八十周年記念事業の募金の際、一般寄付の募金目標額は千万円であったが、郵送にてお願ひしたところ、二千万円以上のご寄付を戴くことができました。改めてお礼申し上げる次第です。

(元吉井高校長 39期)



矢島浩三郎

激動期を過ごした49期

勤労働員のこと

「敵機だ伏せろ！」その声にあわてて用水路に身を潜めた途端、「ダダダダダ……。」とB29が低空飛行で機銃掃射してきた。が同一襲のところで助かった。昭和十九年の秋、岩鼻火薬所に隣接する群馬郡滝川村での、農村動員中のことだった。この種の経験は四十九期の多くが持っている。

農村動員には中学二年の夏に終戦となるまで、クラスによって場所は違ったが、佐波郡名和村・勢多郡新里村—ここには三週間前後の泊り込みで、群馬郡滝川村・岩鼻村へは二十日間ぐらいの通勤動員で出かけた。大半が農作業未経験者だったが、麦刈り、田植え、稲刈り、麦播き、堆肥づくりなど、一通りの農作業をこの間に体験した。

ところで、四十九期の多くは昭和十九年四月に高崎中学校に入学した。本土決戦が喧伝され、戦時政策で高商は高工に併合されて、男子中等学校は市内に二校しかない時だった。また、物資統制下の極度の物不足で、食料の配給も遅配がちなため、ほとんどの友人が高梁八割飯かイモ弁当で、しかも、洋服は雑さはぎだらけという時代だったので、農村動員は辛かったが、銀舍利(白米)が腹一杯食べられる、それだけでうれしかったと、今でもこの話になると友人は異口同音に言っている。動員についてはほかに、堤ヶ岡飛行場づくり、高崎駅や北高崎駅での荷役、そして入学早々の一週間にわたる榛名湖での海洋訓練などが思い出される。

戦時の学校生活

待望の高中に入学したものの動員が多く、登校日数は五分の三くらいだったのではないか。それも授業は教科の学習が軽く扱われ、軍事教練や柔剣道、作業などが半分近くを占めていた。

その上、警戒警報発令となると授業中でも軍靴を履き、空襲警報になると護国神社裏の杉林に避難するという学校生活だった。授業の記憶はほとんどない。そして、「この戦いは聖戦」「欲しがりません、勝つまでは」「月月火水木金土」などと戦意をおおられたが、誰ひとりとして、それに反発や疑問を抱く者はいなかった。

ニックネームと上級生

戦時中はよく殴られ、しこかれた。教師は絶対者だった。例えば、数学の教師の計算が違っていても、それを指摘すると殴られ、逆に生徒が計算間違いすれば、間違った数だけ柱や机に頭をぶつけさせられたものだった。特に若手の配属持校は校長より偉そうに威圧的だった。

こうした時代状況への屈折した形の反発だったのか、我々は職員室を高中動物園といい、校長を黒豚、一年学年主任をペアー(熊)、担任を馬ちゃんなどと、すべてニックネームで呼んでいた。同窓会で当時の話になると、今でもすべてニックネームで呼び、本名を忘れられている教師も多い。こういうことを教えてくれたのは上級生だった。上級生は怖く恐ろしい存在だったが、反面、さまざまなことを教えてくれた親わしい存在でもあった。

複雑な卒業時の姿

戦後の学制改革により、四十九期の仲間が中学四年で進学、修了した者、旧制中学校(五年)で卒業した者、六年間通って新制高校で卒業した者と、卒業形態が三つに分かれた。四十九期の卒業の姿は激動と変革の時代を如実に物語っているといえる。

先生方への信頼

ところで、戦中戦後でその態度や発言を百八十度転換させ、その変化が異様に思われた教師もいたが、戦後、高中に赴任された比較的若い

先生方は指導内容を柔軟に編成し、個性的な授業をして下さった。それが新鮮で、我々は自発的な学習意欲を喚起されたものだった。例えばギリシャ文化を一年間講義した先生、新憲法をかなり学問的に講じてくれた時事の先生、新聞記事を取り上げグループワーク形式で授業を進めた先生など、単なる知識ではなく、ものの見方考え方の形成に大切なものを教えて下さったような気がする。

すべてが事始め

新制高校の発足と同時に、ホームルーム、自治会、学校図書館、選択科目、学校新聞や新たな部活動など、現在の高校教育活動のかなりの部分が、高校二、三年の昭和二十三、二十四年に実施された。前高との第一回定期戦も三年時のことだった。その多くは生徒の自治で行われたため、我々は結構楽しんだが、先生方は大変だっただろうと推察された。

今、教育の多様化個性化がいわれ、総合制の導入や中高一貫教育が新たにいわれているが、我々は過渡的現象として一時期、中学一年から高校三年までが同一校舎で学んだ経験や、高校三年時には選択商業科目として簿記会計や商業経済が設けられ、三分の一以上が選択した経験をもっている。

記念誌「栗附野の風」刊行

こうした四十九期の正負の体験や思い出を、時代の生き証人として、生きた教育資料として残そうという思いも込めて、今から七年前、還暦にあたり記念誌「栗附野の風」を刊行した。七十路を目前にした今、毎年七月第一土曜日に発行している四十九期同窓会では、また何かをという声が開かれる昨今である。

(元前橋南高校長 49期)

山 莊 記



中林 勝利

高高創立百周年記念式典が昨九年五月に行われました。記念事業として翠樹会館が建ちました。ここは我々の学生時代には、講堂があった場所です。思い起こせば、創立六十周年記念が入学した年の昭和三十三年に行われました。

高崎高校の節目に五十九期生は学生時代を過ごした事をよかつたと思っております。名物校長田中悦平先生がおられて、新しい校歌ができました。草野心平作詩・芥川也寸志作曲の「上州の三つの山は……」であります。それまでは、もともと応援歌であった「翠樹」が戦後ずっと校歌として使われてきたのでした。文化祭もにぎやかに、提灯行列があり、帰ってきてから校庭でファイヤーストームがたかれました。三年の時には何と女子高生を招いてフォークダンスが行われたのでした。生徒会、運動部、文化部になかなかユニークな同期生がいたので、面白い企画になったのだと思われまます。

観音山に山崎清司君が山荘を建てました。彼が現在生活している地名と、経営している会社の社名より「つくばね山荘」と命名しました。年に幾度か高崎に来るが、その時以外は使わないので、管理する五十九期生を決め、自由に使ってくれてよい、という事になりました。この山荘のおかげで、同期の友人達との親睦がさらに深まる事になったわけです。

窓からの眺めは誠にすばらしく、高崎市が目の下一杯に拡がり、正面には赤城山がそびえています。平成二年に「山荘開き」

を行いました。地元高崎や京浜地区の五十九期生が三、四十人程集まりました。高崎芸術短大の井上晴比彦教授の教え子で、女性中国琵琶の名手、王偉華さんの演奏で始まりましたが、これが縁で後に彼女のリサイタルを五十九期会が後援する事になりました。

五十九期の代表幹事であった竹内成幸君の亡き後、広田政道君が我々の代表幹事となっており、毎年の高高同窓会総会の担当幹事は無事にはたす事が出来ました。この同窓会総会の担当幹事年の協力が、五十九期の結束の基になっております。山荘が出来た事により、さらに強力な親睦・協力が続いております。富田一治君などは毎週のように山荘の草木の手入れや掃除などを率先して行い、清潔に美しく保ってくれました。上野格成君の兄上野公成先輩の参院選には、山荘グループを中心に応援しました。橋爪脩君の兄橋爪和夫先輩の県議選も同様でした。山荘では一カ月おきに、広田政道君を中心にいろいろな企画をしました。経済問題を聞く会、政治の話、音楽や歴史の勉強会……等々で講師は同期生に依頼しました。茶道では大日本茶道学会や安藤流（御家流）の友人に指導してもらい、お茶会も開きました。英語に堪能な友人には、お茶席に招いたオランダのニベリング教授の通訳などをお願いしました。

駒井実君が政治を語り、衆院選挙に出馬したいと言いました。山荘に集まっていた全員「時期を待つべきだ」と話し、本人も納得したようでした。が夜も十一時頃

に突然、推薦する党から公認の電話が入りました。本人は急遽立候補すると言いました。群テレの幹部が、もしそうなら今夜中に録画しないと間に合わないと言いました。己むを得ず、山荘グループは今度は応援するハメになってしまったのです。これが前々回の衆院選の一月前の出馬の真相です。この結果、五十九期の七人が木村洋君の会社を集まり、治田芳久君以下の選対本部が組まれ、相談中に本人はマイクを握り街頭に飛び出していき、選挙が始まってしまいました。全くアレヨアレヨという間の出来事でした。

駒井実、上野公成先輩、橋爪和夫先輩等の選挙に計らずもかわってしまいましたので、五十九期は選挙好きだと一部で言われましたが、決してそんな事はありません。山荘に集い、観桜会を催し、茶を喫し、よき音楽を聞き、語り合い、静かに酒を酌み交わすのが、本来の五十九期生の集いなのです。

東京や関西方面からの来高者にはホテルに泊まるかわりに山荘に泊まり、地元同期生と語り合い、お互いに啓発しあってもらいたい。又地元の同期生は、家族や友人と山荘で山野草をつみ、樹間の散策を楽しんでもらいたい。これが山荘を管理する我々の願いなのです。

なお、山荘は十年五月より山崎清司君の友人に長期借りてもらう事になりました。

(株)中林精良堂代表取締役 59期

論壇

「人との出会い」



井上 忠男

九月の始め、母校で教鞭をとっておられる同級生の矢島哲雄君から電話があった。彼の声を聞くのはおそろしく卒業以来かもしれない。仕事の事でも、随筆でも何でもよいということなので、本欄への寄稿を快く引き受けさせていた。彼が声をかけてくれたのは、きつと堀口前校長のご紹介ではないかと勝手に思い巡らした。確か、高高にも当時、青少年赤十字部というものがあつたように思うが、はつきりした記憶すらない。そんな私が青少年赤十字を担当するとは思えない。そんな私を巡りあわせである。堀口校長は、高高退官後、日本赤十字社群馬

県支部で青少年赤十字担当の囑託をされている。仕事を通じて、先生と私は交流をもたせていただくことになった。先生のご依頼で、群馬県内の校長研修会や吉井高校、万場高校、藤岡女子高校、勢多農林高校などの創立記念日に赤十字をテーマに何度か講演をさせていただいた。こういう形で郷里と仕事でつながりを持つとは夢にも思わなかった。

大学を卒業後、ほとんどの同僚が銀行や商社などに就職を決めていったのに比べ、私はなかなか就職を決めかねていた。ゼミの教授は、それを気にかけていたようだが、元来、発展途上

国の開発援助に興味のあつた私は、一般企業には全く関心がなく、会社訪問もしなかった。そんな訳で、万が一を考へる小心者の私は、滑り止め？と身の程知らずで受けた政府系某金融機関の二次試験にこぎつけた。しかし面接官の一撃が私の進路を決定させた、と今となっては思っている。「君の話を聞いてみると、君がしたいと思っているのは、うちのような仕事ではないように聞こえるよ。いくら途上国援助といつても、うちは結局は金貸しですよ。それでも、本当に働く気がありますか。」当時（今も）、全くの世間知らずの私は、まさに窮地に立たされてしまった。しばし言葉につまった挙句、口から出た言葉は、事もあろうに、

「わかりません」の信じられない一言だった。それ以来、人間土壇場になると本音がでると思っている。ならば最初から本音で生きた方が、と思うようになった。

その後、縁あって日本赤十字社に勤務することになった。ゼミの教授が米国人だったせい、か、Red Crossに決まったと報告すると、彼は、「Red Crossで飯がくえるのか」と眉をひそめた。私は、「日本のRed Crossは給料をくれるみたいですよ」といった。そんな認識しかない当時の私だった。

数年後、友人のある編集者に依頼され、この頃の顛末や赤十字の話を本に書いたことがある。二十年後、私の職場に若い部下が入ってきた。英語が堪能なので理由を聞くと帰国子女だという。お父さんの仕事を聞いて私は驚いた。かつて私を一蹴した某銀行のエグゼクティブだったのだ。息子の彼は東大卒の優秀な職員だったが、私同様、企業人とは程遠いようで、一冊の本を読んで赤十字に感動し、試験を受けたのだという。本の名前を聞いて私は二度驚いた。

私が書いたものだったからだ。残念ながらその部下も昨年、故人となつてしまった。その彼が担当し、情熱を注いできたネパールの山村に彼を記念する自然流下式水道施設が完成する。十一月の現地落成式に私は、故人のご両親とともに参列する。人生には不思議な巡りあわせがあるものだ。

結局、私が国際部で全職の開発協力担当課長になるまでには十五年の歳月がかかった。しかし、その間、アジア・太平洋、アフリカ、中東、極東ロシアなどを舞台に援助に関わる様々な体験をさせてもらった。最も印象に残る仕事の一つは、一九九一年の湾岸戦争だ。イラクの敗戦直後、私は、イラク北部に帰還するクルド人難民救援のモニタリングのためにスウェーデン赤十字の代表と共にランドクルーザーを駆ってヨルダン経由でイラクに入った。アンマンの日本大使館員は別れ際に、「井上さん、イラクには日本の領事館もなく、通信もできないので、政府としてもあなたの保護はできません。くれぐれも気をつけて」と乗々したことを言う。バグダードまでの千二百キロ。チクリス・ユーフラテス川にかかる橋は、多国軍の爆撃で大きな損傷を受け、通行も慎重を要する。バグダッドからは北部のクルド人地帯まで約四百キロ。おびただしいイラク軍の戦車がクルド地帯に砲台を向けている。背後からもしも間違つて一撃されたら。そんな思いが背中をよぎる。頼りになるのは、赤十字旗への信頼感だけである。戦争を知らない世代の私にとって、それは初めての戦場地域の臭いであり、赤十字のダイナミズムを実感する体験であった。

途上国援助の中でも、ラオスへの支援は個人的な思い入れがひとしおだった。最初にピエンチャンを訪問した時、私は、父の実家のある安中市の四十年程前の風情を思い起こしていた。町のたたずまい、人々の営みといったものが、子供の頃の田舎の記憶を蘇らせた。以来、この国は私の最も好きな国の一つとなった。HIV

検査をはじめ、主要な血液検査体制の整っていないラオスは、隣国タイからのエイズの侵入を最も懸念していた。この国に必要な検査体制の基礎を築くための援助事業を立ち上げることが私の仕事だった。今では、ラオス政府と日赤の援助で新しい血液センターも完成し、多難なから一歩一歩前進している。

人との出会いも面白い。時には意外な高高のOBと巡り会うこともある。十五年程前、飢餓が深刻だったエチオピアからの帰途、ロンドンからの機上で偶然、OBサミットを終え帰国する福田元総理にお目にかかった。挨拶すると福田さんは、「君も高高のOBかね」と気さくに接してくださり、「最近では京浜同窓会も無沙汰してしまつて」、などとニコニコされて、しばし談笑させていただいた。

ロンドンというともう一人忘れられない人がいる。昨年十月、私は欧州出張の合間にケンジントン宮殿を訪ねた。ダイアナ妃のご冥福を祈りたかつたからである。死後二カ月以上経ち、宮殿の鉄扉には、たった一本、白いバラが寂しげに供えられていただけだった。私は、阪神大震災の後、日本を訪問されたダイアナ妃とお会いしたことがあつた。震災直後、外国人関係者の安全調査事業のため、大阪出身の国際部の若い女性職員を伴つて現地で二週間仕事をした。妃殿下は来日の折、日赤を訪れ、救護関係者を労つてくださり、その折、私は安全調査についてダイアナ妃に説明した。「私は二週間ですが、彼女は二週間頑張りました」と同僚を紹介すると、妃殿下は「どこの国でも女性の方が助けられるのですね」といたずらっぽく笑顔を見せた。私はその後、ダイアナ妃をめぐる様々な話題に接するにつけ、あの時の言葉は案外、妃殿下の本心だったのでは、と思つている。

(日本赤十字社 組織推進部青少年課長 70期)

特集

「高崎高校百年史」完成

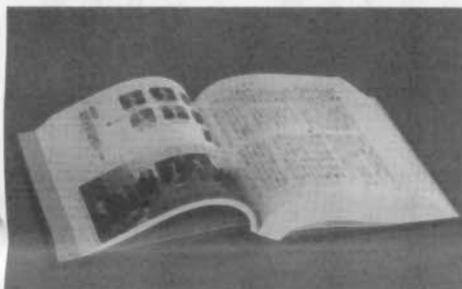
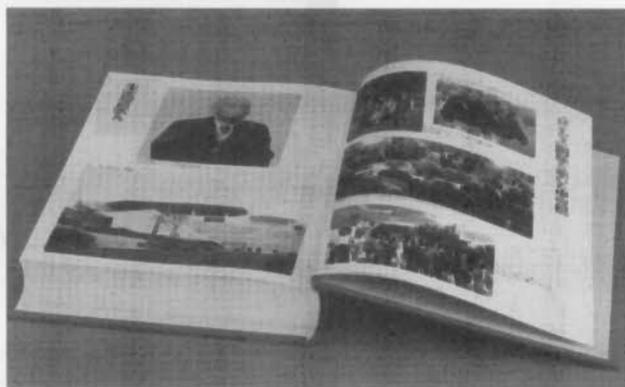
上巻 「高崎高校百年史」について

本巻は、明治初期の学制発布にはじまり、明治三十年に創立された本校の前身である「群馬県尋常中学校群馬分校」の記事から、平成九年の創立百周年記念式典に至る本校百年の歴史を、時代を追った編年体でまとめたものです。

- 第一部 高中誕生
 - 第二部 上和田の雄叫び
 - 第三部 上和田から乗附へ
 - 第四部 太平洋戦争の影響の下に
 - 第五部 校舎焼失からの復活
 - 第六部 乗附の山猿
 - 第七部 高ホルネッサンスから未来へ
- 明治期（明治初期～明治四十五年）
 - 大正期（大正元年～大正十五年）
 - 昭和前期Ⅰ（昭和元年～昭和十三年）
 - 昭和前期Ⅱ（昭和十四年～昭和二十五年）
 - 昭和後期Ⅰ（昭和二十六年～昭和四十三年）
 - 昭和後期Ⅱ（昭和四十四年～昭和六十三年）
 - 平成期（平成元年～平成九年）

以上のように全体を七部で構成し、各時代の主な出来事に焦点を絞ってできるだけ写真や新聞記事を利用して多面的に記述したものです。本校ではかつて「高崎高校八十年史」と「90周年小史」が発行されていましたが、今回の百年史では、それらの学校史を継承しつつも、新しい視点からまとめ、「見て読んで楽しむ学校史」という性格づけを行いました。また、多くの同窓生の方々から貴重な資料をご提供いただき、充実した紙面になったと思います。

（箕輪明 70期）



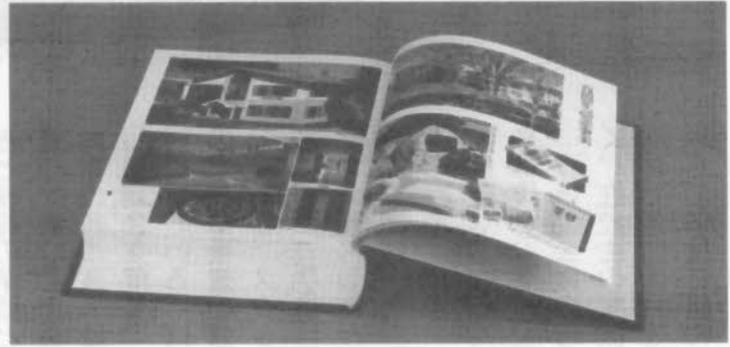
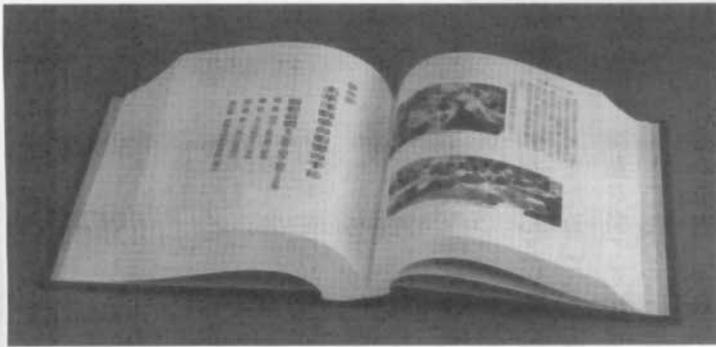
「高崎高校百年史」
平成10年3月31日
発刊

■本書の体裁

書名 「高崎高校百年史」
上巻 通年編 本文約800頁
下巻 人物史編 本文約550頁
体裁 B5判、上製本、並箱付（上下巻セット）、
表紙布クロス、箔押し（平・背）
頒布価格 5,000円（送料込み）

■申込み方法

同封の振込用紙（加入者名＝高崎高校百年史編纂委員会）にて代金を振り込んでお申込み下さい。維持会費納入用の振込用紙（加入者名＝群馬県立高崎高校同窓会）とお間違いにならぬように御注意下さい。



下巻「翠櫛の群像」について

「翠櫛の群像」は高崎中学・高崎高校の伝統とその環境の中で果立っていった二万五千の卒業生に焦点をあてたユニークな人物誌です。

人物編では福田超夫、中曾根康弘、土屋文明、清水善造、橋外男、蝦山政道、山口薫ら三十八名の同窓を取り上げ、澤柳政太郎、峯岸米造、猪狩梅三郎、岩澤正作、村上成之、内藤由己男、田中悦平の七名の恩師を取り上げました。二十七名の同窓生により分担執筆したものです。今まで知られていないエピソード、写真、交友関係を知ることができ、読み物として、研究対象として、各方面から絶賛されています。

座談会は第一回を戦争で最も悲惨な青春時代を過ごした三十七回、三十八回、三十九回とし、第二回を高崎中学から高崎高校への転換期の四十七回、四十九回とし、第三回を八十年代初頭のスポーツ黄金期の八十二回、八十二回、八十三回とし、昨年八月に収録したものです。若き青春時代にもとって高崎中学、高崎高校の思い出を昨日の出来事のように語っていただきました。伝統ある学校の当時の一端を知ることができるでしょう。

巻末の高中・高人名辞典は卒業回の一回から八十四回まで各分野で活躍した、また活躍している三百七十三名を掲載しており、現在「翠櫛セミナー」の講師依頼、学年講演会の講師依頼、同窓生のネットワーク作りに活用されています。将来的には次回の人物誌の礎になるものです。

(植原 政明 69期)

上毛出版文化賞 特別賞受賞

人物編「翠櫛の群像」
高崎高校百年史編纂委員会
(編集長 植原政明)

高崎高校が開校したのは一八九七年。昨年、創立百周年を迎えた。「高中・高高という伝統と環境の中から果立っていった人物に焦点を当てること、学校百年の歴史がより身近なものとして検証できたと思います」。

参考にしたのは、長野県松本深志高校の学校史だった。「参考書」を見た時には編集は簡単な作業に思えました。だが、実際は一筋縄では行かなかった。

編集作業上で困難をきわめたのが人物の選定。同校は二万五千人の卒業生を擁し、政治・経済・文化などの分野で業績を残した人は数知れない。現在、スポットを浴びている人も多数いる。「総務委員会から人選を一任され、「これは」という人をピックアップしたら五百人を超えてしまいました。苦勞に苦勞を重ね、約一年近くかかって八十数人まで候補者を削ぎ落としました」。

総務委員会では資料収集が可能かどうかを念頭に植原案を協議し、最終的には政治家の福田超夫、中曾根康弘、歌人・土屋文明、直木賞作家の橋外男、画家・山口薫ら四十五人に絞り込んだ。

執筆は同窓生二十七人が担当。取材の過程で新事実も発掘された。「英語の教科書「ジャック アンド ベテ」の生みの親の萩原恭平は酒豪とされていますが、家人の話では酒は飲まなかったそうです」。

同本は後半に人名辞典も併せ載せ、森鷗外の小説「羽鳥千尋」のモデルとなった羽鳥千尋ら三百七十三人を収録した。「この本が、さらには百二十年史を編纂する際に『第二集 翠櫛の群像』の礎になればと思っています」。

(上毛新聞 十二月二日より抜粋)

地域・職域の同窓会報告

高崎市役所翠樹会について

会長 青木 健二

市役所翠樹会は、大変伝統のある会である。平成九年十一月にその会長をお受けしよう一年がたつ。

現在会員は、二百八名で各部課の中で大活躍のついでである。

私たちの年代は、役所にお世話になる者が誠に少なく、教育畑の私にお鉢が回ってきたものと思う。以前は、会員ももったいなくもあり部長クラスが列をなしていたと聞く。

また近いうちにそうなることを祈り後輩を育てていくところである。

さて会の活動だが、毎年十一月に總會を開き、決算・予算を審議し事業報告と役員承認と誠にスムーズに会は進む。続いて市長様をご招待し、先輩同窓の各市議会議員の顧問様をお迎えし懇親会を開催、大変な盛り上がりを見ている。同窓とはよくいったもので先輩後輩の意がおのずと通じるものである。スクラムを組んで歌う応援歌「翠樹」が年代により校歌であった。その年代の最後がそろそろ還暦になるうか。実は、私どもの年代なのである。

応援歌、校歌、級会の歌など先輩の方ほどなつかしく目頭をあつくし歌う様は実に心を打つものである。

役所の会員の母校に寄せる思いは熱く、在校生の文武両道の戦績を期待し団体で全国大会等への出場の機会に心からの激励応援の気持ちを入れて市役所翠樹会ということまで金一封を贈呈している。甲子園にも過去春に出場した

がその時は、かなり奮発したようだった。

今の校歌が出来た折り作詞家の草野心平氏が来校し全校の生徒に話しかけた。「いつの日か甲子園の空に声高らかに歌われることを期待する。」

私の胸に残る一場面であるが全校生徒より拍手喝采を浴びた。その日の来ることを期待し役所の活動の一部分を紹介させていただき終わりたい。

会員一同、新庁舎より、観音山のすそ野にそびえる母校の益々のご発展を祈りながら…

(教育委員会生涯学習部長 57期)



高崎新庁舎

榛名翠樹会だより

榛名翠樹会長 土岐 正

榛名町地区に高高同窓会支部が発足したのは昭和三十九年一月二十五日で、最初の名称は群馬県立高崎高等学校同窓会榛名町支部でしたが、昭和六十二年一月三十一日に榛名翠樹会と改名しました。

その母体となったのは旧里見村高中同窓会支部で、大正時代に発足し初代支部長は五期卒の富澤与曾五郎氏、二代目は八期卒の元里見村長の清水武十郎氏、三代目は小生で終戦後復員早々支部長に推薦され同窓会支部と母校との橋渡しをして来ました。昭和二十六年一月三十日の母校火災には逸早く駆けつけました。

本会の会則は、第一条 本会は会員の交誼を厚くし、兼ねて母校教育の振興充実に協力するを以て目的とする。

第二条 会員は母校卒業生及びかつて在学したもので、本町在住若しくは在職している者を以て組織する。

役員は会長一名、副会長、理事、幹事、監事、庶務会計、顧問はすべて三地区(室田地区、里見地区、久留馬地区)から一名乃至四名宛選出されます。

現在(平成十年度)榛名町地区の同窓生は約二百人近くおります。浜名敏白前県会議長(四十五期)を始め、石井清一町長(五十七期)、木暮繁敏収入役(五十三期)、清水

尚教育長(五十期)等役場の主要ポストを同窓生が占めております。

翠樹会の総会は母校同窓会の一週間後に概ね毎年開催し、母校から校長が教頭、母校同窓会から会長が副会長が必ず出席し、母校の現況と同窓会の活動等を話して戴き、母校と地区同窓会との絆を一層緊密にし、和気藹々と交わり、時の過ぐるも知らぬ程で最後に「翠樹影を」と校歌を謳歌して終宴しております。

昭和四十二年母校の体育館建設の時は榛名翠樹会は一丸となって協力し、毎月積立して目標の金額を寄附しました。又母校の野球部が春の選抜で甲子園に出場した昭和五十六年には、喜んで百万円近くの後援資金を繰出ししました。昨年行われた母校創立百周年には二十万円寄附しました。

母校が発展することは私達同窓生にとって無上の喜びです。そのために微力ではありますが、我が榛名翠樹会は今後とも母校教育の振興に協力してゆくと所存です。

最後に当会の維持運営に献身的に盡力されました庶務会計の二十二期中島貞男先生、三十二期多胡二郎先生、四十二期新井充先生に深甚の感謝をいたします。

母校の更なる発展を心からお祈りします。

(土岐内科医院長 30期)



横田同窓会長と筆者(左側)

県庁「高朋会」について

高朋会幹事長 金井達夫

県庁の高高卒業生の集まりである「高朋会」の活動状況について、編集委員会から依頼がありましたので、報告をさせていただきます。

その歴史は古く、当時上毛新聞社の社長であった篠原秀吉氏（高中五期）の発案により、昭和三十年代に「高朋会」と命名され、今日に至っております。

現会長は元県教育長の横山巖氏（高中三十八期）で、会員数は、OBを含め四百八十名を数え、新入職員の歓迎会や職員の手配に関する活動を執り行っております。毎年発行している会員名簿「翠園」は各部幹事が無報酬で作成しており、また、毎年二月定期県議会の開会日に、「群馬会館食堂」にて新年総会を兼ねた懇親会を開催し、先輩後輩が肩を組みながら、応援部OBの指導の下、一丸となって、高らかに翠園を歌うのが恒例となっております。

さて昨年はサッカー部、今年はバレー部と文武両道の精神の下に母校が全国的な活躍をしておりますが、今後とも益々のご盛栄をお祈り申し上げます。なお、県庁内には他に太高の金山会や富高の鏡会等々、多彩な同窓会があることを申し添えます。

（群馬県庁総務部財政課 課長補佐兼係長 70期）

〔近況報告〕京浜高崎高校同窓会

京浜高崎高校同窓会の創始は、明治三十五年（一九〇二）の高陽会の発足であるが、その後、昭和二年（一九二七）に神楽坂の恵比寿に四十人の先輩が集い、京浜高中学（会長根岸米蔵氏）が開かれ、次いで昭和十六年（一九四一）、日比谷の松本楼に約二百人が参加して、京浜同窓会設立総会が開催された。

こうして京浜地区同窓会活動が高まった矢先、わが国は第二次世界大戦に突入、時局柄会の活動は一時停止した。

戦後、再発足の創立総会が開かれたのは、昭和二十八年（一九五五）になってからのことである。

初代会長は宮部次郎氏（一期）で、以後、柄沢修輔氏（二期）、島田昌三氏（三期）、長野文一氏（四期）と続き、五代目会長に「ミスター京浜高崎」こと高岡繁氏（十九期）が昭和三十八年（一九六三）に就任。以降、晩年の昭和五十九年に上利嘉野氏（三十四期）、南雲今朝雄氏（三十二期）の会長代行をおくものの、平成元年（一九八九）にご逝去されるまで、実に二十六年もの長きにわたり会を全面的に支えてこられた。



高岡氏亡き後六代目会長には南雲今朝雄氏が、次いで七代目に岡本正己氏（三十三期）、八代目に浦野清氏（四十三期）、そしてこの十月より九代目会長に中村清氏（四十六期）が就任。副会長に岸芳彦

（四十六期）、保坂英二（四十八期）、大木紀元（五十八期）／母校同窓会副会長兼任）、幹事長には三木芳樹（五十九期）、副幹事長に梅山敏夫（六十一期）、水上勝之（六十二期）の各氏を選出。母校同窓会同様の若返り人事で、二十一世紀へ向けてのスタートがきられました。

現在、会の活動は年一回の総会兼懇親会と、昭和二十九年（一九五四）創刊の会報「翠園」の発行がメインで、会報は本年度既に四十四号を発刊。執筆は、二人の総理を始め各界にそうそうたる人材を輩出してきた高崎・高崎にふさわしい陣容で、会報は会員以外の方々からも有料購読の希望さえ寄せられているほどです。

会員数は約三千人で、年一回の総会兼懇親会を従前は春に開催し、新入会員（その年の高高卒業生）を無料招待しておりましたが、諸般の事情で一九八九年から十月開催とし、会員の呼びかけの開催となりましたので、出席者が約九十人程に減少し、少々寂しい会になってしまいました。

そこでテコ入れもかねて昨年からは、翠園の編集長でもある当方と後輩の編集委員に活性化の任が下され、編集委員の協力を得て、当方の本業のノウハウを少し加えた新しい懇親会を企画。アトラクションに芸能人の友情出演や同窓生の経営する企業から提供の豪華景品が当たる抽選会（会長賞はペアーで一泊二日の旅行）、出版物の無料進呈、初めて出席の方のサポート等々で会は息を吹き返し、出席者は一気に二倍。その盛会ぶりはマスコミ

京浜同窓会副会長 大木 紀元

でも取り上げられ、出席者は年々増加の一途です。

特に、前高、高女、渋谷等のOB、OGや夫人、子女の同伴OKの企画が功を奏し、近い日、会員と非会員がフイフイファイフティーになるような勢いですが、高崎在住の同窓生や現役高校生同伴の父親の出席も増えております。

また、本年発足した「群馬県人会連合会」（県下の各高等学校京浜地区同窓会と出身地域県人会が参集。浦野清前会長が会の副会長で、当方が事務局長。事務局は群馬県庁の東京事務所）との関連で、他校との交流がますます深まっております。

来年のことを言うと鬼が笑うといいますが、来年の十月は、京浜同窓会にお出掛けください。昔のマドンナに出会えるかもしれません……。

そのほか、前幹事長の山田清二氏の肝入りで誕生した囲碁クラブ、春秋二回開催の懇親ゴルフコンペ、写真同好会、翠園編集委員中心の夜を徹しての「粋乱会」（リーダーが下戸です）から決して酔乱にはなりません。別称「朝までシンポジウム」、U・S・AならぬU・S・M生が皆勤賞、皆、乗附の時代に戻って盛り上がっております。

これからも、福田起夫先輩からいただいた「良い友は一生の宝」をキーワードとして、偉大なる先輩と有能なる後輩の集いの場として、当会が発展いたすよう努めてまいります。

（輪大紀デザイン代表取締役 58期）

地域・職域の同窓会報告

財団法人翠樹育英会の現況

田中 順

設立以来十三年を迎えている。当初は金利が高くて果実で、十名以上の奨学生を採用、余剰金を基本財産に組入れることさえ可能であった。ここ数年は低金利で果実での運用は底をつき、累卵の危機に瀕しているといっても過言ではない。現況を紹介し、更なるご理解とお力添えをいただきたい。

平成十年一月二十四日、同窓会総会に資料として添付したが、基本財産は、四千七十三万円（本年度組入れ予定は約三百万円）、奨学生合計六十八名。支給総額は千八百万円を越す規模になった。本年度給付者は予備を含めて本校生徒三名にすぎない（実質二名）。

ここ十年以上になるが、同窓会総会において、長年の功績により、叙勲、褒章、大臣表彰の栄に浴された先輩を同窓会員共通の榮譽として顕彰させていただいている。その返礼と申しては失礼な表現であるが、長年の同窓会の美風として定着している、同窓会と表裏一体の翠樹育英会にご理解をいただき、貴重な浄財をご出捐されており、同窓会関係者は常々心より感謝申し上げている。反面、梨の礫の先輩には、情報伝達が思うにまかせない憾みがあったので敢えて申し上げるが、顕彰を受けっぱなしでなく、郷土の後輩の健全な育成のために、ご助勢いただければ、この上もなく有難いことである。

遺憾ながら、最近、先輩からの浄財の発露があまりみられない（平成十年一月顕彰を受けられた同窓生では現在まで皆無）。財団の窮状をみるに耐えず、本年退職された故古川功校長、通信制高橋列教頭からのご寄付が際立っている。有難いことに過去にも、職員校長

以来退職された今井教頭、高橋事務長、金井校長、堀口校長からもご出捐いただいている。サッカーOB会からのご寄付も有難いことであった。顕彰の無にかかわらず、多くの先輩からのご寄付も忘れてはならないことである。今夏、一服の清涼剤として、素敵な朗報に接することが出来た。干天の慈雨とはこういうことであろう。後輩を思いやる純真にして心美しく、心豊か

な先輩には心底から敬意と謝意を表すものである。同窓会では、自分達のために金を出してもらおうという思い根性を払拭し、後輩のために提出する無上の喜びを共通認識にしたいものである。事情が許せば、善意に満ち満ちた先輩の快挙に肖りたい。同窓会には心洗われ、感銘に心がうち震えることがある。高高は素晴らしい。

(田中歯科院長 51期)

創立百周年記念事業会計 決算報告書

収入の部				
項目	予算額	決算額	増減	備考
寄付金	227,000,000	229,809,170	2,809,170	
同窓会準備基金	24,500,000	24,500,000	0	同窓会会計補助金
教育後援会積立金	40,000,000	40,000,000	0	9年度までの積立 年額400万円
学校史売却費	2,500,000	5,610,000	3,110,000	(5,000円×1,122部)
雑収入	0	1,056,336	1,056,336	銀行利息
合計	294,000,000	300,975,506	6,975,506	

支出の部				
項目	予算額	決算額	増減	備考
事業費	272,490,000	273,861,721	△ 1,371,721	
(1)翠樹会館建設工事費	220,000,000	220,000,000	0	
(2)翠樹会館建設設計料	5,150,000	5,152,000	△ 2,000	
(3)翠樹会館周辺整備費	1,540,000	1,545,000	△ 5,000	翠樹会館周辺植栽他
(4)翠樹会館備品整備費	3,000,000	2,953,169	46,831	テーブル・椅子・棚・演台等
(5)学校史発刊費	35,500,000	37,341,396	△ 1,841,396	学校史(上下巻) 6,000部 @3,402円 目で見る同窓史 3,000部 @1,200円
(6)高中の碑建立費	2,500,000	2,523,500	△ 23,500	
(7)高中・高小ビデオ制作費	3,200,000	3,192,000	8,000	1,000本 @3,192円
(8)体育館観覧整備費	1,600,000	1,154,656	445,344	観覧代補助
式典費	7,000,000	6,416,738	583,262	
(1)記念品代		1,501,395		翠樹弁当、紅白飯頭等
(2)祝賀会費		1,220,518		祝賀会補助、その他
(3)印刷費		965,895	(6,416,738)	招待状、学校案内、プログラム等
(4)備品等購入費		1,054,150		看板、フロアシート、トランシーバー、マイク等
(5)消耗品費		1,674,780		リボン、接待用消耗品代等
運営費	8,000,000	8,926,099	△ 926,099	
(1)会議補助費	3,000,000	2,554,430	445,570	基金・常任委員会等の会議費
(2)通信・印刷費	3,000,000	3,269,686	△ 269,686	他意書、封筒、基金領収書等の印刷 学校史の発送費
(3)雑費	2,000,000	3,101,983	△ 1,101,983	振込手数料、基金雑費、事務用品等
予備費	6,510,000	600,000	5,910,000	
合計	294,000,000	289,804,558	4,195,442	

収入差引残高

収入 支出 残高
300,975,506円 - 289,804,558円 = 11,170,948円

上記のとおり報告いたします。

平成10年6月29日 群馬県立高崎高等学校創立百周年記念事業実行委員会

会長 小山 勝一
会計 荒木 勉、飯野 良二、金井 明、田口 哲男、桜井 修史

監査の結果、適正であると認めます。

平成10年6月26日 監査 金井 豊、五十嵐哲夫、石井敬之助、大塚喜八郎、安藤誠太郎

残金については、6月29日の創立百周年記念事業実行委員会解散総会において、高崎高等学校に寄付することに決定しました。

卒業生の作品紹介 14



今年9月2日、OBの島崎康夫氏(51期)、鈴木勝氏(51期)、石崎良三氏(52期)、井田秋雄氏(53期)から、本校「翠樹会館」に六名の絵画が寄贈されました。それぞれの絵の放つ個性の光で、ロビーやホールが趣を変えて目に映るようになりました。母校にお立ち寄りの際は是非ご覧ください。

褒章・叙勲者紹介

平成十年度

●勲三等旭日中級章

林 啓男(78)(第38期)

群馬大学名誉教授

●勲五等瑞宝章

戸丸 啓之(78)(第38期)

元東武商會会頭理事長 自營(中島製菓)

●勲五等双光旭日章

小坂橋 文夫(77)(第39期)

元公立中学校校長 元松井町教育委員会教育長

●藍綬褒章

塩川 祐次(66)(第50期)

(元塩川製作所代表取締役)

●紺綬褒章

島崎 康夫(66)(第51期)

洋画家

●文部大臣表彰

鈴木 信行(60)(第56期)

県学校教育部長

●PTA活動振興功勞者文部大臣表彰

内田 欣治(55)(第61期)

弁護士

※昨年度の褒章・叙勲者紹介に漏れがあり、大変失礼いたしました。ここに紹介いたします。

第8回翠樹体育会ゴルフ大会レポート

■ネット

順位	部	氏名	グロス	HC	ネット
1	庭	遠藤 潤	79	8.4	70.6
2	剣	大山 駿作	85	14.4	70.6
3	陸	後藤 次一	77	6.0	71.0

■グロス

順位	部	氏名	南	西	グロス
1	水	梅澤 寛	38	37	75
2	陸	後藤 次一	37	40	77
3	剣	堀口 順	40	37	77

■団体戦

1位	剣道部	77	81	85	85	328
2位	庭球部	79	83	84	84	330
3位	卓球部	79	84	84	84	331

会員名簿について

平成九年五月一日に、新しい同窓会会員名簿が刊行されました。御住所や勤務先の異動など、変更がございましたら、郵便でご連絡下さい。名簿に残部がありますので、申し込まれる方がございましたら、こちらも郵便で行うようお願い申し上げます。

なお、「職業別同窓会名簿」等は、本同窓会とは一切関係ありませんので、ご承知おき下さい。本同窓会による会員名簿の次回刊行は平成十四年です。

宛先〒370-0861 高崎市八千代町二丁四一

高崎高校 同窓会名簿刊行委員会

定価〓四、五〇〇円(送料込み)

翠樹文庫

BOOK BOOK BOOK

●著者

環境経営論 I	清水 紀人(88回)
歌集 吾妻	原 一雄(29回)
土屋文明私観 増補版	・
新町少年義勇団史	井出 存祐(定13回)
子どもの権利条約の研究(法政大学現代法研究叢書12)	永井 憲一(49回)
子どもの人権と裁判(法政大学現代法研究叢書17)	・
源氏物語-愛の可能性(二)「うるはし」をめぐって	吉永 哲郎(54回)
分子遺伝学概論(バイオテクノロジー教科書シリーズ5)	高橋 秀夫(59回)
ホシノ酵母と国産小麦で作る 生きているパン	伊藤 幹雄(51回)
太平記④(新編日本古典文学全集57)	長谷川 端(51回)
住宅の原価公開	伴 祐爾(鈴木 勝)(51回)
粘土の世界	(日本粘土学会編) 萩原 成騎(77回)
「粗忽者の記」	島崎 康夫(51回)
ビルマの首飾り	武者 一雄(中村一雄)(33回)
政治と哲学	中曾根康弘(35回)
日本人に言っておきたいこと	・
現代、世界及び日本の課題	・
税理士業務と責任(現代税務全集34)	新井 隆一(46回)

母校だより

●各部の活躍・活動

バレー部

十八年ぶりのインターハイ出場。念願の全国大会出場を先輩方が成し遂げた。

他校と違い練習時間が短いというデメリットはあったが、新人戦から、ベスト8・ベスト4・準優勝と二歩一歩確実に実力をつけていき、そして待ちに待った優勝の二文字を勝ち得た。これも日々の練習と、毎週のように行われた遠征とによるものだろう。インターハイでは惜



インターハイに出場したバレー部員

しくも予選ブロックで敗れてしまったが、全国という高いレベルのプレーにこれとてもよい経験となり、また僕達の目指す目標を直に感じ、目的意識がはっきりとなった。

インターハイ出場により、国体選手も八人中五人が本校から選ばれた。国体でも全国ベスト16という成績を残した。

こうした昨年の成果を受け継いで、春高、インターハイ出場を果たせるよう、一日一日を大切に全員で努力していきまうので、OBの方々の御指導、御声援をよろしくお願いいたします。

柔道部

今年のハイライトは夏のインターハイ(香川県)での小暮君の活躍でした。個人戦60kg級において県大会で優勝し、



背負い投げをうつ小暮俊介君

高柔道部から五年振りに全国大会切符を手にししました。調整を重ねて迎えた本大会では本人の調子も良く準々決勝(4回戦)まで駒

を進めることが出来ました。あと一歩のところまで全国三位入賞を逃しましたが堂々の五位入賞を果たし表彰を受けました。高柔道部にとっても全国大会入賞は快挙であり、本人にとっても周囲にとっても誇り高き金字塔となりました。

また、六月に行なわれた関東大会も、八年連続出場を重ね、組み合わせにも恵まれて大会当日を迎えました。予選リーグで山梨県一位の日川高校、千葉県二位の市立船橋高校と対戦し、一勝一敗どおしの三すくみとなり、内容差にて二位となりトーナメント出場はなりませんでしたが、新チームとなった現在、来期に向けて稽古に励んでおります。御声援をお願いします。

陸上部

関東大会に出場した8種目の中から、円盤投と4×100mリレーが厳しい戦いを勝ち抜き、全国インターハイの出場権を獲得しました。7名で臨んだ香川インターハイの、円盤投に出場した大塚祐紀(3年)は、全国ランキング5位に位置し、18年ぶりの入賞に期待がもたれましたが、全国の壁は厚く予選通過記録49mを越えることができません、残念ながら決勝進出を逃してしまいました。見えないプレッシャーにうち勝ち自己の記録を更新することの難しさ、勝負の厳しさを改めて感じさせられました。

その後、この失敗を胸に練習に取り組み、10月熊本県で行われた日本ジュニア選手権大会で、大学生に混ざって一般の円盤投(2kg)に挑戦し、43m17の自己新記録で6位入賞、また、「かながわゆめ国体」では、50m80を投げ見事第二位入賞を果たしました。応援に駆けつけた部員達も勝負の厳しさと精神面の大切さを痛感したと同時に、自分たちの仲間がなし得た素晴らしい感動と、自分達にもできるかもしれないという自信を少し持つことができたと思います。

来年に向けて今部員達は、厳しい冬季トレーニングに入ろうとしています。体力作りからスタートし、精神面の強化、技術の習得、そして、人間性の追求を柱に、「自己を磨き自己記録を更新し、全国場で戦っていききたい」と思っています。

OBの皆様方には、常日頃よりたくさんのご支援、ご声援を頂きまして誠にありがとうございます。今後とも宜しくご指導をお願いいたします。



声援にこたえる大塚祐紀君(左側)

SPORTS

運動部

- ① 県総合体育大会
- ② 関東大会
- ③ インターハイ予選
- ④ 全国高校総体
- ⑤ 国体
- ⑥ 県新人大会
- ⑦ その他の大会

空手道部

- ① 団体戦欠場
個人戦 組手・形に出場
- ③ 団体戦欠場
個人戦 組手・形に出場
- ⑥ 団体形 予選落ち
団体組手 2回戦(対前高1-4)で敗退

弓道部

- ① 団体 優勝→関東大会出場
個人 岡本 翔 第3位
- ② 予選落ち
- ③ 団体 5位
- ⑦ 関東個人選抜県予選 岡本 翔2位
↓ 関東大会出場

剣道部

- ① 1回戦 高崎 4-1 前橋南
- 2回戦 高崎 0-3 農二
- ③ 1回戦 高崎 2-1 育英

硬式庭球部

- 2回戦 高崎 1-4 前橋西
- ⑥ 一九九九年二月二十四日実施
- ① 団体戦 (5月) ベスト8
- ③ 団体戦 (6月) 第3位
- ⑥ 個人戦 (8月) (ダブルス)
酒井隼樹・新井洋組 優勝
(シングルス) 酒井隼樹 第3位
団体戦 (10月) ベスト8

硬式野球部

- ⑦ 春季関東地区高校野球県予選
1回戦 高崎11-1玉村
2回戦 高崎10-5高崎東
3回戦 高崎5-6農大二
第80回全国高等学校野球選手権群馬大会
1回戦 高崎5-4前橋
2回戦 高崎5-2利根商
3回戦 高崎6-4前橋商
準々決勝 高崎4-7前橋工
秋季関東地区高校野球県予選
1回戦 高崎5-7桐生

サッカー部

- ① 対育英 (0-6) 第3位
- ③ 対育英 (3-5) 準優勝
- ⑤ 井上詔司 (3年) 群馬選抜として出場
- 1回戦対大阪 (0-2)
- ⑦ 全国高校サッカー選手権県大会
対前商 (0-2) 第3位
県高校サッカー1年生大会

山岳部

- ① 第7位
- ② 出場辞退
- ⑤ 加藤基市嗣 (2年) 群馬県予選通過したが関東ブロック予選通過ならず

柔道部

- ① 個人戦 松村幸男 (3年) 3位
- 団体戦 7位
- ② 団体戦 予選リーグ 2位
- ③ 個人戦 60kg級 小森俊介 (3年) 優勝
久保田隆史 (3年) ベスト8
73kg級 松村幸男 (3年) 第3位
81kg級 猿谷剛史 (3年) 第3位
- 団体戦 ベスト8
- ④ 個人戦 60kg級 小森俊介 (3年) 第5位
- ⑦ 学年別大会 1年の部
60kg級 国原大 準優勝
73kg級 櫻沢正巳 準優勝

水泳部

- ① 200m個人メドレー 新井祐介 3位
- 200m自由形 黒田直次 4位
- 400mメドレーリレー
金井・中西・新井・黒田 3位
- 400mリレー
金井・中西・新井・黒田 5位
- 800mリレー
松本・角田・新井・黒田 5位
- 学校対抗では6位
- ⑥ 50m自由形 林裕一郎 2位

ソフトテニス部

- ① 団体 3回戦敗退
個人 中川・吉田組 (1年) ベスト8
- ② 個人 中川・吉田組 2回戦敗退
- ③ 団体 3位
- ⑤ 関東ブロック出場 今井裕司 (3年)
- ⑥ 団体 3位
- ⑦ 1年大会 中川・吉田組 ベスト8
水曜会西毛地区大会
2年の部 飯塚・大崎組 1位
1年の部 中川・吉田組 3位

卓球部

- ① 5位
- ③ 5位
- ⑥ 個人戦 ベスト64 (3名)

軟式野球部

- ① 1回戦 高崎5-3長野原

- 2 回戦 高崎3-2太田
- 準決勝 高崎0-10前工
- ⑥ 2 回戦 高崎0-7前商
- ⑦ 全国高等学校軟式野球選手権大会
県予選(7月)
- 1 回戦 高崎2-12長野原

バスケットボール部

- ① 第2位
- ② Bブロック出場1回戦
- ③ 第3位
- ⑤ 2年 小澤朋克(群馬少年選抜メンバー)
- ⑦ 県高校強化大会Aブロック優勝

バレーボール部

- ① 4 回戦 高崎対館林商工
- 準々決勝 高崎対吉井
- 準決勝 高崎2-0伊東
- 決勝 高崎0-2前商
- ② 1 回戦 高崎2-1東海大浦安(千葉)
- 2 回戦 高崎1-2堀越学園(東京)
- ③ 4 回戦 高崎2-0富岡
- 準々決勝 高崎2-0桐商
- 準決勝 高崎2-0高北
- 決勝 高崎2-1前商 優勝
- ④ グループ戦高崎1-2皇学館(三重)
- 敗者復活戦高崎2-0美里工(沖縄)
- グループ戦敗退
- ⑤ 1 回戦 シード
- 2 回戦 高崎2-1富山
- 3 回戦 高崎0-2大分 ベスト16
- ⑥ 2 回戦 高崎2-0富岡
- 3 回戦 高崎2-0藤岡
- 準々決勝 高崎2-1太田東

- 準決勝 高崎1-2桐商 ベスト4

ラグビー部

- ① 予選リーグ 55-0 対桐一
- 50-24 対関学
- 62-17 対常磐
- 決勝トーナメント
- 準々決勝 26-5 対太田
- 準決勝 0-125 対農大二
- 3 決 22-24 対樹徳 第4位
- ③ 準々決勝 11-34 対県央
- ⑥ 1-2月実施予定

陸上部

- ① 200m 長谷川揚平 5位
- 400m 高橋央尚 4位
- 400mH 高橋央尚 3位
- 4×100mR 佐藤・大野・長谷川・高橋 4位
- 4×400mR 中谷・大野・長谷川・高橋 6位
- 走巾跳 大野雅之 5位
- 三段跳 大野雅之 4位
- 円盤投 大塚祐紀 優勝
- 総合24点
- ② 4×100mR 佐藤・大野・長谷川・石野 5位
- 円盤投 大塚祐紀 2位
- ④ 4×100mR 佐藤・長谷川・梅山・高橋 6位
- 円盤投 大塚祐紀 17位
- ⑤ 円盤投 大塚祐紀 2位
- ⑥ 800m 中山陽右 7位
- 千500m 中山陽右 6位

- 5km競歩 土屋智史 優勝
- 相川雄広 3位
- 塚本正幸 4位
- 唐澤毅 5位
- 4×400mR 土屋・河野・中山・梅山 6位
- 棒高跳 梅山暁生 優勝
- 稲垣圭吾 2位
- 高田武蔵 6位
- ⑦ 全国高校混成・長距離・女子400m H・競歩競技大会
- 5km競歩 柳沢泰洋 31位
- 関東陸上競技選手権大会
- 5km競歩 柳沢泰洋 7位 (県高校新)

CULTURE

学芸部



囲碁部

○第13回関東地区高等学校囲碁選手権(ハンディ戦) 8年連続8回目の出場
団体戦 嶋澤嘉伸(2年) 3段
湖上航(2年) 初段

将棋部

○第8回関東地区高校文化連盟将棋大会
個人戦 原澤祐輔(2年)

○第21回全国高校総合文化祭将棋部門
群馬県予選
個人戦 準優勝 藤巻隆男(3年)
団体戦 準優勝
上原健志(3年)
原澤祐輔(3年)
横尾雄友(3年)

新聞部

○群馬県高校新聞コンクール 知事賞

吹奏楽部

○県吹奏楽コンクール 高校A組銀賞

増田剛(1年) 5級
8勝4敗・4位

○第22回全国高校囲碁選手権大会(オール互選) 9年連続9回目
団体戦 嶋澤嘉伸(3年) 3段
湖上航(3年) 初段
増田剛(2年) 5級
2回戦まで

個人戦 嶋澤嘉伸(3年) 3段
2回戦まで

○第22回全国高等学校総合文化祭(オール互選) スイス方式
団体戦群馬県代表選手
嶋澤嘉伸(3年) 3段
湖上航(3年) 初段

第五十二回定期戦

我々は第五十回の記念大会を始め、三度の定期戦を経験した。通算で一勝二敗と負け越してしまったものの、部対抗や一般対抗・フラッグ隊・実行委員など通して得た汗や友情は、きっと我々の青春の一ページとして残されることであろう。

しかし、定期戦は我々の思い出となる過去の出来事であるだけではない。なぜなら、定期戦の真の目的は両校生徒

の交流にあり、それは定期戦が終って真に開かれるものであるからだ。我々はいかにから高高という枠を飛び出し、前高出身者と出会うことがあるだろう。その時、定期戦は彼等との共通の青春の思い出となり、交流を開くきっかけとなるはずだ。それにより、定期戦の真の意義は達成され、定期戦は我々の中で生き続けることができる。

記憶の中の定期戦は高校生のまま時を止めるが、定期戦が時を止めることなく、我々の未来

の中に在り続けるということ、高高を卒業するにあたり考えてもらいたい。
 (第五十二回高前定期戦 実行委員長 高木 幹倫)

古川先生 逝去



平成七年より三年間、本校の校長を務められた古川功氏が、七月十四日、ご病氣のため逝去されました。享年六十歳でした。在職中は、校舎の全面改築をはじめ、創立百周年記念事業の完成に多大なる尽力をされました。また、生徒・教員・保護者に話されるお話しは、深みのある心を打つ言葉が多く、内外から先生の早すぎる死を悼む声が聞かれます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

大学	年次	8年	9年	10年	大学	年次	8年	9年	10年
北 大	大	10(10)	6(3)	8(5)	慶 應 大	大	52(44)	75(56)	67(55)
東 北 大	大	23(19)	30(28)	25(22)	早 稲 田 大	大	47(42)	63(44)	68(57)
筑 波 大	大	4(2)	5(4)	2(2)	中 央 大	大	42(34)	56(37)	42(34)
千 葉 大	大	11(11)	18(17)	9(9)	明 治 大	大	64(54)	53(38)	40(33)
群 馬 大	大	39(33)	34(31)	28(25)	上 智 大	大	7(6)	12(9)	11(6)
(医)		4(3)	8(8)	8(6)	立 教 大	大	14(12)	8(5)	12(8)
埼 玉 大	大	6(6)	8(8)	6(5)	学 習 院 大	大	4(3)	14(8)	4(4)
東 京 大	大	17(15)	20(15)	15(12)	青 山 学 院 大	大	24(21)	28(26)	24(22)
一 橋 大	大	2(2)	8(7)	5(5)	法 政 大	大	22(20)	42(32)	26(19)
東 工 大	大	6(6)	6(4)	6(5)	日 本 大	大	95(88)	87(70)	61(54)
横 国 大	大	7(5)	11(10)	6(6)	東 京 理 科 大	大	102(85)	99(77)	101(86)
新 潟 大	大	18(16)	5(4)	21(20)	芝 浦 工 業 大	大	21(19)	16(14)	21(21)
金 沢 大	大	5(3)	8(6)	4(4)	同 志 社 大	大	1(1)	22(20)	6(1)
信 州 大	大	3(3)	3(3)	2(2)	立 命 館 大	大	18(12)	52(46)	22(15)
名 古 屋 大	大	1(0)	2(2)	2(1)	高 経 大	大	19(15)	19(16)	9(8)
京 都 大	大	6(4)	5(3)	1(0)					

	8年	9年	10年
A 国 立	190(158)	191(163)	164(139)
B 公 立	25(18)	28(20)	13(12)
C 私 立	693(574)	799(603)	654(513)
A + B + C	908(750)	1,018(786)	831(664)
卒 業 者 数	397	375	357
現 役 進 学 者 数	270	275	240
現役合格率($\frac{\text{受験者数}}{\text{合格者数}} \times 100$)	83.2 %	86.2 %	84.7 %

高前	高前	種 目	高前	高前
6	0	陸 上	6	3
6	0	バスケットボール	3	6
0	6	バレーボール	6	3
0	6	軟式野球	0	9
0	6	卓 球	3	6
		駅 伝	3	6
		綱 引	3	6
		玉 入 れ	3	6
		ソフトボール	0	9
		水 泳	9	0
0	6	ラ グ ビ ー		
6	0	サ ッ カ ー		
0	6	柔 道		
0	6	剣 道		
0	6	軟式野球		
0	6	硬式野球		
6	0	弓 道		
0	6	空 手 道		
6	0	硬式野球		
30	54	小 計	36	54
高前 66		合 計	前高 108	

人事異動

(平成10年度)

退職者

古川 功 校長

高橋 洵 通信制教頭

本間 義人 通信制

転任者

篠原 正泰 教諭→桐生高校

飯塚 光 教諭→前橋東高校

高橋正四郎 教諭→前橋女子高校

岩井 寿史 教諭→富岡東高校

寺町 良次 教諭→前橋商業高校

桜井 修 事務主事→県教委

新任者

桜井 直紀 校長→県教委学校指導課長

梶井手 存祐 教頭→高崎商業高校

関口 博士 教諭(国語)→前橋女子高校

中村 博昭 教諭(地理)→前橋東高校

大須賀誠一 教諭(政経)→富岡高校

斎藤 敬一 教諭(化学)→富岡高校

高橋 賢作 教諭(体育)→藤岡工業高校

鳥居 吉一 教諭(体育)→前橋商業高校

斎藤友紀雄 教諭(国語)→新潟県立三本木高校

※ 他県交流人事

※ 小坂橋政隆 教諭(理科)→渋川工業高校臨時制

※ 設楽 弦一 事務主事→伊勢崎興陽高校

※ は通信制

平成9年度 高高同窓会 経常決算報告

平成9年度 経常会計			
収入の部 (平成9年1月1日～平成9年度12月31日)			
費目	平成9年度予算	平成9年度実収入	備考
前年度からの繰越金	40,604	40,604	
入会金	2,500,000	2,835,400	全日制322人、通信制17人
維持会費	7,000,000	6,660,000	2323人 ※100周年への返金多し
利息	2,396	5,525	
雑収入	15,000	562,340	ネクタイピン代、100周年準備金戻し
合計	9,558,000	10,103,869	

平成10年度 同窓会経常会計予算				
収入の部 (平成10年1月1日～平成10年度12月31日)				
費目	平成10年度予算	平成9年度予算	増△減	備考
前年度からの繰越金	146,136	40,604	105,532	
入会金	2,800,000	2,500,000	300,000	
維持会費	7,000,000	7,000,000	0	
利息	2,864	2,396	468	
雑収入	15,000	15,000	0	
合計	9,964,000	9,558,000	406,000	

支出の部			
費目	平成9年度予算	平成9年度実支出	備考
会議費	1,100,000	993,352	平成10年度総会補助30万円也
祝賀費	500,000	451,000	ネクタイピン代等
饗別費	300,000	245,000	平成9年転退職員へ
慶弔費	100,000	179,180	葬儀花輪代等
通信印刷費	500,000	253,760	維持会費納入礼状、業書代等
旅費	100,000	126,000	京浜同窓会出席者等
会報発送費	1,700,000	1,805,968	
会報作成費	1,600,000	1,858,500	カラー印刷
事務費	600,000	538,939	人件費、事務用品代等
同窓会長賞費	150,000	144,090	文鎮代
補助費	600,000	600,000	図書館30万、早稲体育会30万
100周年準備費	2,000,000	2,001,434	100周年準備費(印刷、録音、資料複製代等)
雑費	50,000	760,510	100周年等返金(678,500)
予備費	258,000	0	
合計	9,558,000	9,957,733	

支出の部				
費目	平成10年度予算	平成9年度予算	増△減	備考
会議費	1,100,000	1,100,000	0	含む新年総会準備金
祝賀費	500,000	500,000	0	
饗別費	300,000	300,000	0	
慶弔費	150,000	100,000	50,000	
通信印刷費	500,000	500,000	0	
旅費	100,000	100,000	0	
会報発送費	1,900,000	1,700,000	200,000	
会報作成費	1,700,000	1,600,000	100,000	
事務費	600,000	600,000	0	
同窓会長賞費	150,000	150,000	0	
補助費	600,000	600,000	0	早稲体育会・図書館
100周年準備費	0	2,000,000	△2,000,000	
特別会計積立	1,500,000	0	1,500,000	新規積み立て
雑費	500,000	50,000	450,000	
予備費	364,000	258,000	106,000	
合計	9,964,000	9,558,000	406,000	

差引残高 146,136円
 次年度への繰り越し 146,136円
 経常会計について上記のとおり報告いたします。
 群馬県立高崎高等学校同窓会
 会計 荒木 勉 飯野良二 三浦昭久

監査の結果、上記報告に誤りのないことを認めます。
 平成10年1月17日
 群馬県立高崎高等学校同窓会
 監査 石井敬之助 安藤震太郎

第97回高高同窓会新年総会のご案内

同窓生の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。
 明年の新年総会は、私達68期が担当させていただきます。私達68期が担当させていただきます。私達68期が担当させていただきます。
 数年前にわたり大いに情熱を注いだ創立百周年記念事業という大きな目標を達成した今、新体制のもと二十一世紀へ向けて新たな一歩を踏み出した同窓会にふさわしい、にぎやかで、楽しい新年会になりますよう。諸先輩のご指導、ご助言を仰ぎながら準備をすすめてまいります。
 懇親会は懐かしき友と親しく語り合い、肩を組み声高らかに校歌や聖歌、クラス会

の歌等を歌い、楽しい一時を過ごしていただけるよう工夫をこらしております。当日は是非とも同期の方々、先輩後輩の方々等お誘い合わせのうえ、たくさんの方のご出席を当番期一同心よりお待ちしております。

期日 平成十一年一月二十三日(土)
 時間 午後三時より
 場所 高崎ビューホテル
 会費 五千元
 (当番期68期代表 梅澤 寛)

維持会費の納入について

維持会費納入状況の推移



左の表を見てお分かりのように、維持会費収入は年々減少してきており、来年度予算案の編成に苦慮しております。その上、毎年度経常会計から繰り入れて積み立てていた特別会計も、全て創立百周年記念事業に投入し、現在残高は0です。このため、不測の支出に対応することができない状態で、困惑しております。このような事情をご理解いただき、是非会費納入にご協力をお願い申し上げます。
 納入については、同封の振込用紙(加入者名「群馬県立高崎高等学校同窓会」)をお使いください。重ねてよろしく願い申し上げます。

編集後記
 同窓の皆様の多大なる御協力をいただき、会報第32号が発刊できました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。御多忙の中、貴重な原稿やお写真を寄せ下さいました。まことにありがとうございます。(本部長 梅澤 寛)